夢から、さめる
~ Tricoroll Close Ending
DreamWish

夢から、さめる　～ Tricoroll Close Ending.　【試し読みver.】

※本作は、過去に同人誌として出版したものを改めて電子書籍化したものです。
現在公表されているものとは、一部の設定などについて異なる可能性があります。
また電子書籍化にあたり、同人誌版からの修正および省略があります。ご了承下さい。

▽ ＤｒｅａｍＷｉｓｈ Ｗｅｂサイト

花唱集め

STAGE-1　夢想結界 ～ Unstable World.　- 8

STAGE-2　果てしない渇望は、こころが天蓋を落とし得るのか？ ～ Lunatic Hope.　- ~~67~~

STAGE-3　幻想郷カタストロフィ ～ Broken Fantasy !　- ~~144~~

STAGE-4　楽園の素敵な終焉 ～ Dream Over.　- ~~199~~

EXTRA　~~? ? ?~~

もし、この幻想に終わりがあるのだとしたら、それは――

TITLE

ちり、ん。

不意に響いた涼やかな音へと意識を引かれ、霊夢は箒を動かす手を止めた。

物憂げな視線が、辺りの景色を一望する。照りつける日差し。石畳へと濃く焼き付いた影法師。周囲に他の人影はない。博麗神社の境内は、いつものとおり曖昧な静寂によって包まれている。

動くものと言えば、わずかにそよぐ梢の囁きくらいのもので――

（……）

気を取り直し、少女は再び自分の足元へと視線を落とした。

ちりん。

はぁ、と小さなため息をついて、霊夢は掃除の続きを諦める。何とはなしに空を仰げば、そこには呆れるほどの雲一つない爽やかな景色が広がっていた。

――侵すべからざる平穏と静けさ。

それは、幾百年に渡って守られ続けてきたこの場所の在るべき姿でもある。

幻想郷全土を覆う博麗大結界と、その要たる博麗神社。そして、博麗の巫女。

それらの歴史について語ることは、幻想郷そのものの歴史について語ることと同義である。かつて、ここに結界を敷き、外の世界から幻想を隔絶した神主の思惑を知る術はもはや無い。しかし、代々の宮司と巫女がその意志を継ぎ、この幻想郷という小さな世界を保ってきたことだけは確かだった。

それが、博麗という名の持つ役割と意味。

積み重ねられる歴史はいつしか伝統となり、やがて理を成す。その

例に漏れることなく、彼女もまた今代を受け持つ博麗の巫女として、変わらぬ秩序を保ってきた。

だが――。この境内は、初めからこんなにも広大なものであったのだろうか？

瑞垣を成す桜の枝には、すっかりと青葉が生い茂っている。そこに淡い花が付けられていた時が、ずいぶんと遠い昔のことのように感じられた。

おかしなことだ。季節の巡る長さなど、彼女の守るべき悠久に比べれば、ほんの一時の出来事でしかないはずなのに――。

幻想の平穏は、静寂によってのみ保たれる。事実、これまでの博麗の巫女は文字通り拍と礼の巫女として結界を守ることを全てとし、妖怪はもとより一切の人間をも遠ざけることで、この閉ざされた静謐な空間を穢すまいとした。故に、そこに横たわる静けさが破られることはない。彼女以外の人間が彼女を訪ねるために境内へと足を踏み入れて来ることも、決してない。

『おーい、霊夢ー』
――あってはならない。
霊夢は鳥居の方へと顔を向け、そこに誰の姿もないことを確認する。

ちりん。ちりりん。

薫風(くんぷう)を顔に受け、少女は静かに目を閉じる。
季節は初夏。抜け落ちるような青空の向こうに、幻想の終わりが迫(せま)っていた。

STAGE-1

〜 夢想結界 〜 Unstable World.

「おーい、霊夢ー」
耳慣れた……というより、今更もう忘れる気にもならない声が境内に響く。
あからさまに眉を潜めてから、霊夢は仕方無さそうに鳥居のある方へと顔を向けた。その先から、小柄な人影が歩いてくる。ろくな用もないというのに毎日のようにここを訪れてくる自称『普通の魔法使い』ことを霧雨魔理沙が、ちょうど本日の青空のごとく晴れやかな笑顔と共に片手を上げた。
それは、幾度となく繰り返されてきた景色。
もはや確認することも莫迦らしい、博麗神社の風物詩にも似た一幕であった。
「いやー、まいった。まいったぜ。ここに来る途中、ちょいと面白い物を見つけてな」
がらがらがら。

魔理沙が動くたび、彼女の背負った風呂敷包みが、静謐な神社の空気をぶち壊している。
霊夢はその様子に眉間の皺を一段と深め、それから何かを諦めたかのようにしてため息を吐いた。境内を掃除する手を止め、突き立てた箒へと寄りかかるように身体を預ける。
無駄なことだとは理解しつつも、少女は魔理沙の向けてくる喜色満面の笑顔へと対抗して口を開いた。
「……あのね。あんた、この場所が一応は神社だってこと忘れてない？　そんなに騒がしくして、せっかく咲いたばかりの桜が散ってしまったらどうするのよ」
「ほほぅ。仮にも神社を守る役目の巫女が、自分の縄張りを『一応』だとは恐れ入るぜ。……ん？　なんだ、桜だと？」
驚いた様子で両目をまばたかせ、魔理沙は境内を取り囲むように咲いている一面の花を見上げた。
霊夢の言葉通り咲いたばかりであるらしい桜の花は、瑞々しい生命の

輝きによって満たさている。淡く朱を帯びた花弁の白さが、今にも空へと溶け込んでいきそうに思えた。そこに一陣の風が吹き渡り、幾枚かの花びらを巻き上げて、その彼方へとさらっていく――。

魔理沙も小さく息を呑む。

幻想郷の春が、そこにあった。

「こいつはまた、見事なものだな。私としては、まだまだ炬燵が恋しい季節だとばかり思っていたが」

「……呆れた。あんた、今ごろになってやっと気付いたわけ？　気の早い木なら、もう何日か前から芽をつけていたわよ」

「つまりは、宴会の頃合というわけだ」

「花なんか見る気もないくせに、よくもまぁ。だいたい元来の花見は梅を見るものだから、その意味ではもう終わりの時節なんだけどね――って、そんな蘊蓄はどうでもいいのよ」

魔理沙は風呂敷包みを早々に地面へ下ろすと、霊夢の断りもなく本殿へと勝手に上がり込んでいた。のみならず、奥の間にあったお茶請けへ

と早くも手を伸ばしている。まさに勝手知ったるなんとやら、だ。
「……で、何よコレ？」
胡散臭いものを見る目そのままで、魔理沙の置き去りにした『何か』を見やる。箒の柄で突いてみると、中からガラガラという固い音がした。石か青磁の類だろうか。いつぞやのような生モノである可能性がない分、まだ安全と言えるかもしれないが――。
「ん？　あー、いいぜ気になるなら開けてくれても。なんなら進呈しても構わない。なに、いつもこの場所を気前よく提供してくれる巫女への、ささやかな礼だ」
「全力で断る。神社を勝手に宴会場にするな。帰れ」
言うべきことだけを端的に告げると、霊夢は包みの前で腕組みをしつつ片目を閉ざした。何であれ、魔理沙の持ち込んできたものが厄介ごとに繋がらない道理はない。とは言え、ここで無視したことで後でより厄介な事態となって降りかかってくる可能性もある。どちらにせよ、面倒くさいものであることについては変わりはなかった。

……さて、どうするべきか。霊夢が思案していると、不意にはらりと布のはだける音がした。おそらく、結び目が緩んでいたのだろう。ある意味では持ち主の性格がよく伺(うかが)える身勝手さで、風呂敷包みが一方的にその中身を晒(さら)す。

果たして彼女が予想していた通り、現れたものは無機質なガラクタの山であった。いかにも魔理沙の好みそうな、使い道もろくに分からないような道具が投げやりに押し込められている。……とは言え、全てが想像と同じだったわけでもない。山の中からガラクタのひとつを手に取ると、霊夢は目を丸くした。

「……どうしたのよ。これ、外の世界の道具じゃない」

「ふふん。どうだ、すごいだろ？」

言って、魔理沙がありもしない胸を張る。

外の世界。それは、文字通り幻想郷の『外側』にある世界のことを指す。幻想郷は博麗大結界によって外部から隔絶(かくぜつ)された土地ではあるが、さりとて全ての繋がりが喪(うしな)われているわけではない。あちらで忘れら

れかけた存在が幻想となって迷い込むことは、さして珍しいことではなかった。だが。

「これだけの数となると、さすがに滅多にはお目にはかかれないぜ？別に、無縁塚へと寄ってきたわけでもないんだけどな。最近、森を歩いてると、割とあちこちにこういうのが落ちてるんだよ。はてさて、あっちでは幻想のバーゲンセールでもやってるのかな」

魔理沙は無造作に腕を伸ばすと、霊夢が手にしていた道具――ピンク色の子豚だかコロボックルだかをあしらった陶器製の置物――をかっ攫う。それから、「お」と声を上げた。

「こいつは、香霖の店で見たことがあるぜ。たしか、『ちょきんばこ』とか言うやつだ。用途は、腹に賽銭を貯めておくことだとか」

何気なく口に出された一言に、それまで呆と視線を彷徨わせていた少女の顔が凍り付く。

まるであり得ないことでも耳にしたかのように、その両目は驚愕によって見開かれていた。

「――まさか。そんなものが幻想になるってことは、外の世界の人間はもう銅銭を集めようとはしていないのかしら……？」
「私に聞くなよ。案外、外の世界ではお金なんてもの自体、既に持ち歩く必要のないものになっているのかもしれないぜ？」
わなわなと両手を振るわせて、巫女は、その周りだけ特に念入りに掃除された、本殿の前にあるものを見やる。
「な、なんてこと……！　うちの神社の『ちょきんばこ』は、年中空っぽだと言うのに……！」
「それこそ、幻想となるには少し早すぎるような気がするぜ」
言って、魔理沙は子豚の腹を指先で弾く。

ちりん。

澄んだ音色が、快い素直さで境内へと響いた。
「うむ。これなら少し手を加えれば、風鈴としても使えそうだな。まあ、

これからの季節にはちょうどいいだろ」
霊夢へと『ちょきんばこ』を突き返すと、魔理沙はいつも通りの快活な笑顔を浮かべる。押し付けられた形となる外の道具をもてあまし、霊夢はあからさまに迷惑げな様子で顔をしかめた。
春風が頬を撫でつける。霊夢は小さく息を吐くと、縁側へと腰を下ろした。気が付けば、魔理沙の姿が消えている。それでもまた掃除に戻る気にはなれず、霊夢は何とはなしに境内に舞う花びらを視界の端で追っていた。
数刻ほども過ぎた頃、魔理沙が当然のような顔をして盆を手に持ち、戻ってくる。その上には、お茶請けと一緒に湯気を立てるふたつの湯飲みが置かれていた。
額に玉の汗が浮いているところを見ると、どうやらこれまた勝手に竈を使って、お湯を沸かしていたらしい。呆れるやら、それとも一周まわっていっそ甲斐甲斐しいのやら。霊夢の反応を気にも留めず魔理沙はその隣へと腰を下ろすと、ずずず、と音を立てて湯飲みを啜った。境内

に置き去りとなった風呂敷包みを眺め、呟く。
「……それにしても、こいつは一体どういうことなんだろうな。流れ着く数も大きさも、日に日に増えているようにさえ思えるぜ。ま、蒐集家の私としてはうれしい限りだが」
「ああ、最近は結界が緩んできているからね」
何気なくこぼされたその一言に、魔理沙は手の動きを止めて隣の巫女を見た。
霊夢は緩慢な手つきで湯飲みを仰ぐと、こくり、と大きく喉を動かす。湯飲みを手元に下ろしてから、ようやく彼女は自分を覗き込む視線の存在に気が付いたようだった。
「どうしたのよ、魔理沙。そんな、いつも以上に面白い顔なんかして」
「結界って……要するに博麗大結界のことだよな？　そりゃ、いったいどういうことだよ」
霊夢はゆっくりと一度まぶたを瞬かせてから、ああ、とようやく合点がいったように相槌を打つ。

「どうって、そのままの意味よ。結界の緩みに伴い、外と幻想郷との境が薄くなって、広がった隙間から外の物が迷い込んでくる。ただ、それだけの話だけど？」

さらりと口に出してから、霊夢は湯飲みから空へと視線を移した。

「――この分だと、大結界が形を保てなくなる日もそう遠くないわね。綻びというのは、一カ所にでも生じると後は連鎖的に広がっていくものなのよ。大抵は、気が付いたときにはもう手遅れね」

ぱきん、と霊夢のくわえた煎餅がふたつに割れる。目は寝ぼけたように胡乱なまま、彼女は空に浮かぶ雲、もしくはその先にあるはずの『外の世界』を見つめている。

しばらく間、その話に対して魔理沙は何も応えることができなかった。

「お、おいおい？　何でもないことのように言ってるが……実際、それはかなりまずい事態なんじゃないのか？」

「まずいも何も、幻想郷は外の世界で喪われた幻想を閉じ込めることで保たれている世界なわけだしね。

もし、その境目が消えようものなら、少なくともこれまでの幻想は幻想として維持できなくなる。それが最終的にどういう結果をもたらすかは、実際になってみるまで分からないけど」

魔理沙が呆然と口を開ける。

その姿をちらりと横目に眺めてから、結界の護り手たる博麗の巫女は、ほんのわずかに目を細めた。――そして告げる。

「……大丈夫よ。そのために、私がいるのだから」

その微笑みに何かを聞き返そうとして、結局、魔理沙がそれを叶えることはできなかった。

風が吹いた。

それまでとまるで脈絡のない方角から来た清風に、境内の花びらが一斉に舞い上がる。その元を追って顔を上げた霊夢は、ちょうど地上を見下ろしていた人影と目を合わせた。

「あー、いたっ。霊夢さーん！」

掃き集められていた花びらを盛大にまき散らしつつ、境内に青い巫女

服の少女が降り立つ。山の中腹にある神社の巫女――東風谷早苗は、縁側で固まる魔理沙の存在に気が付くと、ぺこりと軽い会釈をした。それから、せっかく掃き清めた境内を荒らされて呆然とする霊夢へと、無謀にも笑顔で近寄っていく。

「すみませーん、今日はちょっと相談があって来たんです。最近ですね、うちのまわりにもケータイやブラウン管の類が流れ着くようになりまして、神奈子様に相談してみたところ粗大ゴミならこちらの神社で引き取ってもらえばいいだろうと――きゃあっ!?」

返事代わりに放たれた弾幕に、早苗は慌てて上空へと退避する。

「な、なにするんですか、いきなり!」

「五月蠅い! あんたも、風に吹き散らされる桜の一部になれっ!」

霊夢もその後を追って空中へ飛び上がり、続けざまに撃たれた弾幕を早苗が風の奇跡で受け流す。やがて早苗も弾幕による応戦を始め、後はいつも通りの弾幕戦の様相となった。

目の前で展開される弾幕の花火を、しばらくの間、魔理沙はまばたき

もせずにただ眺めていた。
……が。不意にその口元がにやりと歪(ゆが)むと、魔理沙は傍(そば)へと立てかけてあった箒(ほうき)を手に取り、立ち上がる。その上へと跨(またが)り瞬時の加速で空に向かって駆け出すと、魔理沙は弾幕にも負けぬ大きな声で宣言した。
「お前ら、私に無断で弾幕ごっことはいい度胸だな！　悪いが、私も混ぜてもらうぜ！」
魔理沙の魔砲(スペルカード)が春空を貫き、殊更(ことさら)に混乱の体(てい)を増した弾幕ごっこは、舞い上がった桜の花びらによって彩(いろど)られる。
宴会にも似た、少女たちによる賑(にぎ)やかしくも美しい大騒乱(そうらん)。
――言うなれば、それはいつも通りの博麗神社の光景であった。

「……もう、ここもダメね」
力なく呟くと、八雲紫(ゆかり)は幹(みき)へと押し当てていた手を下ろした。
そこは、幻想郷の外(はず)れにある森の一角である。改(あらた)めて周囲を見渡せ

ば、彼女が触れていたものと傍目(はため)には見分けもつかないような木々が辺(あた)りへと鬱蒼(うっそう)とばかりに茂(しげ)っていた。
人の手の入っていない、自然な森。一方でこの場所を訪(おとず)れるまでには一度のみならず小さな祠(ほこら)を見かけており、この森が人々から崇敬(すうけい)をもって守られていることについては、ほとんど疑いようが無かった。だからこそ藍(らん)は、肩を落としたようにも見えるその後ろ姿へと向かって声をかける。
「紫様」
式の発した呼びかけに、彼女の主人はわずかに首だけを傾けた。
「私にはよく分からないのですが……これは、それほどにまで深刻な状態なのですか？　見たところ、信心の集っている良い神地であるように思えますが……」
藍の言葉が途切れるのを待ち、紫は、にべもなく首を横へと振ってみせた。
「……ええ。結界としての強度は充分よ。けれど、それでもまだ足りな

いの」
「それは、つまり――結界を蝕む側の力が強まっている、と？」
その問いかけには即答せず、紫は神木の頂へと視線を据えた。主人の後を追い、藍も同じ場所へと顔を向ける。優しく広がる木漏れ日が、青々とした葉の間から差し込んできていた。そんな穏やかな光景を見ている限りだと、主人の言葉はまるで冗談のようにしか聞こえない。
紫が、小さくため息を吐く。長らく仕えている藍でさえ、主がこれほどにまで消沈している姿は、ついぞ見た記憶がなかった。
「博麗大結界は、今となっては檻よりも、むしろ柵に近い。結界を張った時代とは、もう完全に立場が違うわ。
その間、外の世界で最も発展したのは『幻想を殺す力』よ。……幻想になるまでの時間が、早すぎる。まるで、あちらの世界では古い物を忘れることこそが進歩なのだとでも思い込んでいるかのよう」
「その変化を……今の幻想郷の者たちは……」
独白にも似た問いを受け、紫の声が固さを増した。

「――力ある存在なら、気付いていてもおかしくはないわね。見た目こそ、いつもの平穏な幻想郷のままだけど、目に見えるもの以外の亀裂はあちこちに生じ始めている。そう、結局のところ――」
そこでいったん息を区切り、妖怪の賢者は諦観（ていかん）するように声を漏（も）らした。
「つまりは、まったくの今まで通りよ。これまでと異なるところが、哀しいほどにまで何一つとして見当たらない……」
その言葉が全てだった。どうしたところで主の力には慣れない己の無力さを痛感し、藍は自らの唇へと牙を突き立てる。
振り向かぬ主人がどのような表情を取っているのか、彼女から知る術はない。代わりに藍は、ふと浮かんできた疑問を紫の背中へと投げかけた。
「……紫様。いつか覚めることが分かっている夢を見続けることに――果たして、意味はあるのでしょうか？」
「その答えを決めるのは、私たちの役目じゃないわ。結論は、そこから

得られる未来を必要とする子たちに出してもらいましょう」
言って、紫がマヨイガへと通じるスキマを広げる。もう、この場所で彼女たちに出来ることなど何もない。
――漆黒の空間に呑まれる直前。藍は、どこかで結界が砕ける音を聞いた気がした。

燐光が爆ぜ、月も星すらもない夜空を刹那の白へと染め上げる。
幻想の歪みが、正されていく――。
異変は、もはや収束へと向かっていた。既に無限軌道の幻想は破られ、後には周回する弾幕の輪だけが残される。
楕円に潰れた円周軌道の外縁に、ゆらり、ゆるりと、紅白の巫女が舞っていた。あれだけ激しい弾幕ごっこを演じているにも関わらず、彼女の纏う巫女服には焦げ目のひとつとして付けられていない。
自棄になった今回の事件の黒幕が更なる弾幕の束を吐き出してくる

が、所詮は同じことだ。既に趨勢の見えた弾幕ごっこには興味が持てず、魔理沙はひとり戦線から外れると、決着の瞬間が最もよく見える場所へと陣取った。

「……すごいですよね、霊夢さん」

同じことを考えていたのか、いつの間にか彼女の隣へと滑り込んでいた早苗が呟く。その言葉に、魔理沙の片眉がわずかに吊り上がった。

元々は幻想郷とは関係ない世界で育った早苗が、異変の解決に協力する――もしくは妖怪退治の味を占める――ようになってから、もうかなりの時間が経っている。しかし、彼女は未だに霊夢のことを何か特別な存在だとでも思い込んでいるような節があった。

ちらりと眼下へと視線をやれば、公転をなぞらえ二重三重の軌道を描く弾幕の隙間を、まるで危なげなく回避し続ける霊夢の姿が見て取れる。……魔理沙からすれば、どの瞬間を切り取って見たところで、霊夢は次の場面には被弾しているようにしか思えなかった。自分なら確実にボム回避する決定的な弾幕シーンを、あの巫女は当然のような顔をしてすり

抜けていく。まるで詐欺だ。魔理沙として以前と比べだいぶ強くなった自負はあるのだが、あれと同じ真似は到底できそうにない。

それでも。魔理沙は、隣で見惚れるような表情を浮かべる早苗の横顔へと視線を向ける。その純粋に見開かれた瞳に先日の神社で霊夢ひとりに惨敗させられた記憶が重なり、魔理沙は知らずのうちにふてくされた口先を尖らせた。

「……あのなぁ。霊夢が、弾幕ごっこで敵無しなのは当たり前だろ？」

ひょっとして初耳だったのか、早苗が意外そうな顔をして魔理沙の方へと振り返る。霊夢へと向けられていた無垢な瞳に今度は自分が射すくめられる形となり、仕方なく魔理沙は説明を続けた。

「弾幕ごっこは、もともと人間や妖怪同士の争いを平和裏に解決するために用意された枠組みだ。そしてあいつは、幻想郷の秩序を護る博麗の巫女。……分かるだろ？　あいつは、弾幕ごっこで負けることなんて、初めから許されちゃいないんだよ」

魔理沙の言葉を受け取った後も、早苗はしばらくのあいだ口を噤んだ

ままだった。視線を宙へとさまよわせ、受け取った言葉の意味をゆっくりと咀嚼してから、ようやくひとつの結論を見つけ出したものらしい。
どこか自信のなさそうな顔で、早苗はおずおずと問いかけてきた。
「……あの。それって、まるで弾幕ごっこのルール自体、霊夢さんを勝たせるために作られたものみたいに聞こえるんですけど……」
「ああ。まさしく、その通りだぜ？」
早苗が、ゆっくりと両目をまばたかせる。器用にも箒の上で胡座を掻き、何故だかふんぞり返った態度になって魔理沙は続けた。
「異変は、最終的に巫女が解決するようにできている。言ってみれば弾幕ごっこで霊夢が勝つのは、朝に日が昇り夕方に沈むのと同じで、幻想郷における自然な摂理の一端ってことだ。だから、あいつが強いのは極めて当然のことなのさ」
「でも、それだと――」
口に出しかけた言葉を、早苗はその半ばで呑み込んだように見えた。意図的に視線を外し、彼女は遠方で繰り広げられる弾幕ごっこの光景を

見る。
釣られて、魔理沙も同じ方向へと顔を向けた。弾幕の花火は壮麗であれどもどこか儚く、やがて訪れるであろう終わりを今にも待ち望んでいるかのようにも見えた。
と、視界の端へと引っかかっていた早苗の横顔が、不意に表情を崩して上を向く。
「……あれ？　でも、勝てっこないって分かっているなら、どうして魔理沙さんは、毎度霊夢さんに弾幕勝負を仕掛けるんです？」
早苗は、純粋な疑問に首をひねった。彼女の持っている印象では、毎回、飽きもせず弾幕ごっこを持ちかけるのは、大概がこの白黒魔女の側であったはずなのだが。
「ふふん。勝てないからって、勝負も仕掛けないでいるようじゃ、いつまで経ったところであいつに勝つなんてできやしないだろ？」
その問いかけへと、よくぞ聞いてくれたとばかりに喜色満面で魔理沙が応える。

「これは私の信条なんだがな。たとえそれが破れない壁でも、破れるまで直進すれば、いつかは必ず破れるものだ。なにせ、そのときには既に破れているんだからな。

安心しろ、そのための準備は、実のところ既に整っている」

「ふーん」

如何にも興味のなさそうな口調で早苗が呟いたところで、ひときわ大きな白光がステージ全体を押し包んだ。

臨界密度の弾幕の中心で、霊夢がスペルカードを宣言している。やがて、かざした符の中から七色の光弾が次々と生じ、それまで彼女を潰そうとしていた弾幕の群れを圧倒的な輝きによって押し返していた。

解き放たれた光弾は緩やかな弧を描き、弾幕ごっこの相手へと向かって殺到していく。

「……――――！　っ！」

光に包まれ、消える寸前。今回の事件の黒幕が心底うんざりした表情になっているのが、魔理沙の位置からもよく見えた。

弾幕も、衛星と無限軌道の幻想も、異変を起こす側と解決する側の区別さえもが曖昧となり、どれもがひとつの眩い秩序の中へと呑みこまれていく。

――こうして。今回の異変もまた、予定通り無事に解決されたのであった。

「あーもう、毎度ながら、面倒くさいったらありゃしないわ……」

弾幕ごっこを終え、今回の事件の顛末を愚痴だか自慢だかよく分からない話を交えて黒幕の少女本人から聞かされ、ついでにお茶など共に一服してきた、その帰り道。

いかにも憂鬱そうな表情で、霊夢はだらだらと魔理沙たちの一番後ろを飛んでいた。

「あの、霊夢さん、大丈夫ですか？　どこか被弾でもしているなら、なんでしたら私がおぶって飛んだ方が……」

「あー、違う違う。そいつはな、異変を解決した後はだいたいこんな感じになるんだよ。どうせ、いつものぐうたら癖が出ているだけだから、下手に甘やかしているとキリがないぜ？」

余計なことを、とでも言わんばかりに霊夢が半目になって魔理沙を睨む。その視線には、あからさまな非難の色が含まれていた。

「……そりゃ、あんたらはいいわよ。弾幕撃って適当に暴れて、黒幕さえ倒せばそれでお仕舞なんだから。だけど私にとっては、面倒事はむしろこれから待っているのよ」

「面倒事？　そいつは、いったい――おわっ!?」

魔理沙が、箒の上で唐突に身体をのけぞらせる。

彼女のすぐ真横の空間に、音もなく一本の細い亀裂が引かれていた。くぱぁと広げられたスキマの奥から、得体の知れない微笑みを浮かべた女性が半身を乗り出してくる。

無論のこと、見知らぬ相手などではなかった。ほとんど条件反射的に、霊夢の眉間へと更なる皺が刻み込まれる。

「紫。あんた今更、何しに出て来たのよ？」
自分の能力で生み出したスキマの縁へと片肘を着いて、大妖怪――八雲紫は、対照的ににこやかな笑みを霊夢へと返した。
「あら、つれないわね。霊夢は、用がないと会いに来ちゃいけないって言うの？」
「むしろ、用があっても出てきて欲しくないくらいなんだけど」
「酷いわねぇ。今回の異変だって、私もちゃんとサポートしてあげたじゃない」
「だから、無敵時間もないワープ能力なんて使いどころがないって毎回言ってるでしょ」
現れるなり、やんややんやと霊夢と言い合いを始めた紫に、魔理沙と早苗は互いの顔を見合わせた。
……まぁ、別にどうだっていいことである。
いいかげん魔理沙がその存在を意識の外へ締め出しかけたとき、聞き逃せない単語が彼女の耳へと飛び込んできた。

「――もうっ！　霊夢がそんなに意地悪するのなら、大結界の修復だって、もう手伝ってあげないわよ!?」
「……大結界？　修復？」
そう鸚鵡(おうむ)返しに呟いたのは、魔理沙と同じく蚊帳(かや)の外へ置かれていた早苗である。
「あ。ひょっとして、さっき霊夢さんが言っていた『面倒事』って、それのことですか？」
表情を変えないまま、霊夢が紫の頭をぽかんと叩く。「あいた」広がったスキマの奥にいったん身体(からだ)を引っ込めてから、紫は霊夢から最も離れた場所――ちょうど魔理沙たちの飛んでいた位置へと再び姿を現した。
一瞬前に見せた失態(しったい)もどこ吹く風で、紫は妖(あや)しく微笑(ほほえ)みかける。
「そうよぉ。異変が起きれば、それによってかき乱された秩序は現実と幻想の境にも影響を与えるわ。あなたたちには見えないかもしれないけど、今の博麗大結界はとても安定を欠いた状態になっている。

――ほら。耳を澄ませば、現実と幻想の狭間で起きる軋みが聞こえるでしょう？」

そう問われ、魔理沙は周囲を取り巻く空を仰いでみた。

西の空に、早くも明星が顔を覗かせている。山際はやや朱に染まっているが、さりとて太陽や雲に罅が入っているわけでもない。聞こえる音と言えば、家路を急ぐ烏の子の鳴き声くらいのものであり――。

牧歌的なまでの、夕暮れの情景。

それは、彼女が長く慣れ親しんできた、幻想郷の景色そのものであった。

「うーん……？」

霊夢と同じく、巫女として多少は結界の心得があるはずの早苗も、魔理沙の隣で同様に首をひねっている。

そっけないふたりの反応にもさしたる失望は見せることなく、紫は小さく肩を竦めた。

「……ま、あまり気にしなくていいわ。結界が緩むのは、言ってみれば

いつものことだもの。幻想郷の秩序を管理する巫女にこの私が力を貸せば、一晩もかけずに元通りにできるわ」

その、言い様に。

何故だか引っかかるものを感じて紫へと振り返った魔理沙だったが、それより早く、紫の身体が彼女の脇を前へと流れた。

疲れを見せた霊夢の肩を抱くその仕草に、魔理沙は自分の立ち入れぬ壁を感じ取る。知らずのうちに半身を引いていた彼女へと、紫の肩越しに霊夢の視線が向けられた。

「魔理沙」

ふわぁ、と博麗の巫女は大きなあくびを手のひらで抑えて、

「そんなわけで、私たちはまだやることがあるの。悪いけど、異変解決の宴会はまた後日にしてもらえるかしら？」

そう、何でもないことのように告げてくる。

「あ、ああ……」

魔理沙が辛うじて声を絞り出すと、霊夢は今にも溶けて消えてしまい

そうな笑みを口元に浮かべ、紫へと連れられて宵の空へと消えていった。
魔理沙は、呆然とその後ろ姿を見送る。
そのときの背中がとても遠くに見えたのは――あるいは、予感であったのか。

ちりん。
どこか遠くで、そんな涼やかな空音がした。

障子越しに差し込む光が、いつしか和らぎ始めている。
それでようやく、早苗は朝の到来を知った。もうだいぶ使い慣れてきた馬毛の筆を硯へと浸すと、彼女は大きく全身を伸ばす。
「んーっ」
……どうやら、また徹夜をしてしまったものらしい。

夜着(よぎ)へと張り付いた肌に空気を送り込みながら、早苗はひとり苦笑じみた笑みをこぼした。しびれる足に無理を言って立ち上がると、文机(ふみづくえ)の上にまとめられていた紙の束を手に取る。それこそが、長らく早苗にこうして無理をさせてきた元凶(げんきょう)であった。

とは言え、それはただの日記である。

ぱらり、ぱらりと、早苗はその中の適当な項(ページ)をめくってみた。

地下帝国、謎の未確認飛行物体、巨大ロボ。

まるで、冒険小説のようだと思う。元より、あちらの世界の早苗に日記を付ける習慣はなかった。だけど幻想郷に来てからは、ただの日記をつけることがこんなにも楽しくて仕方がない。

日常と平凡(へいぼん)が、同じ言葉では言い表すことのできない世界。かつては得難(えがた)かったものであるからこそ、早苗はその奇跡を大切に思う。

幻想がなくとも、人は生きて行けるのかもしれない。けれど、決まり切ったことしか起こらない世界の、なんと便利で、そして味気(あじけ)無いことだろう。あらゆる可能性が中立に存在することを許される幻想郷は、ど

んな想像さえも縛り付けることがない。それこそがここの常識であり、同時に幻想郷という区切られた世界の持つ懐の広さであると言えた。

しかし――。

ぱら……

早苗の手が、あるページにて止まる。それは先日の、幻想郷の空に傍迷惑な人工の星が迫ってきた異変の記録だった。

早苗が見つけ、魔理沙が面白がって首を突っ込み、最終的に霊夢が解決したというその構図に偽りはない。

ただ、その日の日記には、ひとつだけ書かずにおいたことがある。些細な、取るに足らない、でも、どうしてか忘れることのできない疑念。答えの出ない呟きを、早苗はまた胸の内にて繰り返す。

――博麗の巫女が異変を無事に解決することは、幻想郷における摂理の一端。

（でも、それだと――霊夢さんが、まるで幻想郷という仕組みの一部になってしまっているみたい）

妖怪が異変を起こすことは、言うなればただの気まぐれだ。元来は人へと向かう衝動を世界へとぶつけるための儀式であり、気が向かないなら、わざわざ異変を起こす必要もない。その場合、ただ平穏な日々が延々と続くだけである。

対して、巫女が異変を解決することになっている、というのは、一体どういう意味なのだろう。

義務、というのとは少し違う気がする。当然ながら、元凶となる妖怪側は、解決できるようにと意識して異変を起こしているわけではない。

そもそもが、力の枷を外すための行為。持つ力を存分に振るえないのであれば、異変が異変である意味はない。そして、その結末は、人間が妖怪を退治するか、妖怪が一帯の人間を根絶やしにするかのいずれかだ。故に、早苗が伝承で知る外の世界における異変の顛末は、いずれも苛烈なものばかりである。

――不思議ではあったのだ。その危険極まりない異変を、幻想郷では起こすことがむしろ推奨されているという。

幻想郷は、狭い世界だ。ひとたび誰かの敷いた法が定着してしまえば、その支配から逃れる術はないだろう。

いくら、ここの妖怪たちが積極的に人を喰らう気がないと分かってはいても――もし、異変を解決する博麗の巫女が解決を諦めてしまったなら。このルールを作った者たちは、その可能性に考え至りはしなかったのだろうか。

さもなくば、博麗の巫女という存在そのものが、初めからそのために用意されていた駒にしか過ぎず――

（……なんて、ね？）

考えすぎ。こんなのは、ただの言葉遊びだ。

いつもと同じ言葉で自分を落ち着け、早苗は胸に詰まっていた空気をゆっくりと長く吐き出した。

幻想郷はあまりにも穏やかに過ぎるから、つい、そんなことも考えたくなるのだろう。適度な刺激と、その解決。現に、今の幻想郷はその両者を交互に繰り返すことで、何も支障を来すことなく廻っている。それ

でいいのだと宙に浮いた問題を片付け、早苗は朝の支度を始めるために腰を上げた。

きーらー、きーらー、ひーかーるー……

「!?」

突然どこからともなく聞こえてきた唄声に、早苗は、はっとして身を竦めた。神奈子様でも、諏訪子様の声でもない、もっと高くて、くぐもった声。魂を持たぬ器から生まれた、自動再生の合成音声――。

（……まさか？）

早苗は、部屋のふすまを開ける。

一段と大きくなった唄声が、その奥から響いていた。

泣いている子供をあやすような、優しい声。

それは、童謡。

中学へ進学したとき最初に設定して以来、友達からいくら子供っぽい

と揶揄(やゆ)されても頑固(がんこ)に使い続けた、早苗にとってはずっと馴染(なじ)みのメロディーであった。
長いこと奥へと押し込められ、ほとんど存在すら忘れかけていた葛籠(つづら)の蓋(ふた)を持ち上げる。
もう二度と動くことのないと思っていたそれを前に、早苗は呆然と呟き落とした。
「どうして……？」
歌にある通り、スピーカーから出る声にあわせて、アンテナの先端がチカチカッと光を放つ。
有り得ないはずのことだった。幻想郷には、まだ幻想にはなっていない『電波』は届くことがないはずなのに――。
そのことが、果たして何を意味するのか。
何も考えることのできないまま、早苗は葛籠(つづら)の底にあるケータイ電話を、着信が切れるまでただじっと眺め続けた。

朝靄(あさもや)の中を、風を引き裂いて飛ぶ。
自分の知らないところで、確実に何かが起こっている。そう思うと、社(やしろ)の中でじっとしていることなどできはしなかった。疾風(しっぷう)と化し、雲を突き抜けて飛ぶ。いったいどこへ向かえばいいのか、早苗には分かっているような気がした。
着信は、家のリビングに置いてあった電話からかけられたものだった。無意識にリダイアルボタンへとかけていた指を、そのときの早苗はなけなしの理性でもって引き剥(は)がす。……もし、ここで電話をかけたら、それが繋がろうとも繋がらなくとも、私はもう今の場所には留(とど)まれなくなる――そんな気がした。
――幻想と現実の垣根(かきね)が、あからさまに薄くなりつつある。
それが、早苗の確信だった。幻想郷は、外で喪われた幻想によって支えられた世界。そのバランスが崩れた結果は、すなわち――。
ついに妖怪の山の山頂を飛び越え、早苗は全幻想郷を一望の下(もと)に収め

る。
そして、同時に愕然とした。
「空が――!?」
昇りつつある朝日に照らされ、地平線が明るく照り輝いている。
そこに、早苗は見た。
黒ずんだ亀裂――そんなものが、幻想郷の縁から天へと向かって幾筋も走っていた。亀裂は細く、朝日を背にした光の加減によって辛うじて目へと捉えられる程度である。――だが、その温度は。
「――――ッ!!」
正面から亀裂のひとつを覗き込んでしまった早苗は、とっさに両腕で自分の身体を抱き竦めた。明け方とは言え、もう夏も近いというのに、全身の肌が粟立っている。同じ闇でも、夜空の暗さなどとは違う――その亀裂の先に広がっているものは、誰が踏み入れることも叶わない完全なる『虚無』だった。
口元を押さえ、しかし早苗は、その虚無にどこかで見覚えがあること

を思い出す。あれは――そう――八雲紫が広げる結界から覗く隙間と同質のモノだ。……だけど、こちらの虚無には救いというものがない。あの奥には時間と空間、因と果の区別すらない。おそらくは、無限に横たわる停滞だけが支配する場所なのだろうと知れた。

それが天へと向けて伸ばされる様は、まるで幻想郷という小さな世界を握りつぶそうとする、巨大な手のひらのようだった。

まだ天蓋の頂に手をかけるほどではないにせよ、亀裂は、もうかなりの高みにまで空を侵食している。

気を確かに、と自分に対して言い聞かせてから、早苗は唾を呑んでその光景を直視した。

「これって――、いったい、どういうこと……？」

そう口では呟きつつも、早苗の意識は、いま目の前で起きていることを誰よりも正確に把握していた。

――砕けているのだ。幻想郷を守る、博麗大結界そのものが。

八雲紫は異変で結界が緩むのは『いつものこと』であると告げてい

た。だが、これは絶対にその範疇ではない。これほどの規模での侵食は、広げるにしても消すにしても一瞬というわけにはいかない。今の状態となるまでにも、相応の時間がかかったはずだった。

――誰も、気が付かなかったのか？　早苗自身も結界術には一応の心得があるが、幻想郷には自分などより結界の扱いに長けたものなど、いくらでもいるはずなのだ。スキマ妖怪である八雲紫のみならず、かの七曜の魔女に博麗の巫女――

「そうだ、霊夢さん」

おぼつかなくなっていた早苗の思考が、その名前へと収束する。

「霊夢さんに、知らせないと――！」

大結界の管理は、巫女の役目だ。万が一、この異常にまだ気付いていないのだとすれば、いずれ大変なことになる。

そう思い、慌てて身を翻しかけた早苗は、不意に柔らかい感触へと顔を包まれた。

「わぷっ!?」

両方の頬へと伝わる、ふかふかとして温かい『何か』。
どうやら正面から突っ込んだらしいそこから顔を引き抜くと、目の前には視界へと収まり切らない大きな胸があって、その上に見慣れた顔が乗っていた。
「……神奈子様？」
早苗の呟きが風に乗る。
巫女としての早苗が仕える氏神――八坂神奈子は、胸の中にいる早苗をどこか寂しげな瞳で見下ろしていた。
（どうして、神奈子様がここに――？）
早苗は疑問に思ったが、当の神奈子はじっと早苗を見つめたまま一向に口を開こうとしない。どうしたのだろうかと早苗の胸がざわついたが、今はそれよりももっと性急な用事があったことを思い出す。
「すみません。いま、少し急いでおりますので――」
神奈子の脇をすり抜け、早苗は博麗神社へと向けて一直線に飛び立とうとする。

しかしその試(こころ)みは、背後から伸ばされてきた一本の腕によって阻(はば)まれた。
「……神奈子様？」
掴(つか)まれた肩越しに、早苗が振り向く。
神奈子はやはり無言のまま、ふるふると首を横へと振った。
「は、離してください。幻想郷の結界が破れかけているんですよ。ほら、あれです！」
身体を拘束(こうそく)されながらも、早苗は必死に指先を伸ばした。天を握りつぶさんばかりに広がる結界の亀裂を、神奈子がちらと横目に見やる。早苗にさえ見えるものが、その氏神である神奈子に見えぬ道理はない。しかし彼女は一度だけ深く嘆息(たんそく)した後、おもむろに信じがたいことを言ってきた。
「……いいんだ。麓(ふもと)の巫女に、それを知らせる必要はない」
伏せた目が、それ以上は何も聞くなと語っていた。
……とは言え、それで済ませられる問題ではないのだ。早苗は、神奈

子の言葉を自分が取り違えてはいないことを確認すると、驚いた様子で詰め寄った。
「な、何を仰(おっしゃ)っているんです？　これは、幻想郷の危機なんです。うかうかしていたら、ようやく辿(たど)り着いたこの地が崩壊――」
「――幻想郷は、滅びないよ。あの巫女も、結界の異常にはとうに気が付いている。だから、お前は何もする必要がないんだ、早苗」
自分の名前を呼ぶ声が、ごまかしとは分かっていてもあまりにもやさしくて、それで早苗には何も言えなくなってしまう。
――その瞬間。空には雨雲のひとつもないというのに、不意に轟(とどろ)いた雷光が彼女の視界を染め上げた。
白転する空の向こうに、早苗は天へと昇る一筋(すじ)の黄金(こがね)の輝きを見る。
早苗が一度まばたいて視力を取り戻したときには黄金の存在は既になく、代わりにそれが通った道筋には、七色の虹(にじ)が残されていた。

――月のない夜だった。

昼下がりからぐずつき始めていた天気は、いつしか小雨となって薄膜のように幻想郷を覆っていた。

無論、そういう日取りを選んだのには相応の理由がある。博麗大結界は、妖怪のみならず、神をも平等に締め出す封印だ。天照大御神も月読命の力も及ばぬ場所で――というより、目の届かないところで執り行うのが、紛いなりにも神に仕える身にとっての礼というか最低限の気遣いであった。

日没後の博麗神社は、昼間の喧噪が嘘のようにしんと静まりかえっている。傘を手に玉砂利を踏み締めながら歩いていくと、不意に霊夢は境内の中央へと黒い人影が立っていることに気が付いた。

「よう。どこへ行くんだ、こんな夜中に」

堅く両腕を組んだまま、霧雨魔理沙は相好を崩すことなく口にした。

いつから、そこへ立っていたのか。雨脚は弱いとは言え、魔理沙の服はすっかりと水を吸っている。いつも身につけている黒帽子の縁から、

ぽたり、ぽたりと水滴が落ちる。その下にある視線の鋭さが、彼女がここに居(い)る理由を告げていた。
それを見て、霊夢が呆(あき)れたように肩を竦(すく)める。
「別段、大した用事じゃないわ。それに夜中に散歩したところで、蛇(へび)が出てくるわけでもないでしょう？」
「こんな、月のない雨の夜にか？　ぐうたらを絵に描いたようなお前らしくない言葉じゃないか」
「なら、ぐうたらじゃないってことでしょ。さ、そこをどいて頂戴(ちょうだい)。言っとくけど、もし邪魔するつもりなら――」
言い終えるより前に、す、と魔理沙が身体(からだ)をどかした。
そのあまりにも素直な態度に、思わず霊夢の方が面食らう。
「……なによ。あんたにしては、気持ち悪いほど物わかりが良いわね」
「その形容はどうかと思うぜ。なぁ霊夢、お前はよく分かっていないようだが、魔法使いって生き物は、須(すべから)く現実主義者なんだよ。私の中には仮説はあるが、それを裏付けるための実証はない。

……可能性だけの存在ってのは、魔法使いにとっては筐の中の猫と同じだ。だから、まずは観測させてもらう。言っとくが、こいつは既に私の中での決定事項だ」

霊夢は緩くため息を吐く。

頑として揺るがぬその物言いを、弾幕ごっこなしに撤回させるのは困難と知れた。故に少女は傘を前へと傾けると、魔理沙が開けた道の先を歩み始める。

「――勝手になさい」

雨の落ちる音と梢のさざめき、そして二人分の足音だけが、夜の境内へと深く静かに浸透していく。

無音よりもなお深い静寂が、ふたりの身体を包み込む。

行程は、意外にもすぐに終えられた。本殿の大きさからすれば不釣り合いなほど立派な、博麗神社の大鳥居。外の世界へと向けられて建てられていると云う朱塗りの鳥居の前で、霊夢はくるりと向き直る。

その真下から額束を仰いで、彼女はまるで独りごちるかのように呟い

た。
「いるんでしょう、紫（ゆかり）？」
霊夢の呼び声に応え、忽然（こつぜん）と八雲紫がその背後へと現れる。
ちらと傍（かたわ）らに向けられる視線を察（さつ）したように、霊夢は鳥居を見上げたままで、不機嫌さを隠しもせずに口にした。
「構うことないわ。そもそも、誰かに知られて困るようなものでもないんだし。見学志望だって自分で言ってるんだから、別にいいわよ。――でも、魔理沙」
唐突（とうとつ）に変化した声色（こわいろ）に、魔理沙は目をまばたいた。一枚の霊符を懐（ふところ）から引き抜き、博麗の巫女はそれを鳥居へと向けてかざす。
「自分の身は、ちゃんと自分で守ってよね」
（……そりゃ、いったいどういう意味だ？）
魔理沙が問い返すよりも早く、明らかな変化が彼女の周囲へと生じていた。
ちりん。

ちりりん。
風鈴と間違えそうなほどの澄んだ音色が、次第に大きく、強くなっていく。
ちりり。ちり、ちり、りん。ちりん。ちりりり、りり――
音は止まない。魔理沙がその出所を探ろうとしたとき、ちりん、と一際大きな音が頭上から聞こえた。なにかと思いそちらを見やれば、目と鼻の先に迫った『夜空』が自分へと向かって一直線に墜ちてくる。
「う、うわあぁぁぁぁっ!?」
回避も忘れ、魔理沙が両腕で顔を覆う。だが、いつまで待っても衝撃が身体へと訪れることはなかった。
恐る恐る、交差した腕の間から上を見る。
するとそこには、差し迫っていた夜空に代わって、傘を開いたひとりの少女の背中があった。
「……まったく、世話が焼けるわね。せっかく霊夢が、あらかじめ忠告してあげてたのに」

そうこぼして紫が中空を指先でなぞると、そこに空間のスキマが開かれた。その中から、たった今魔理沙を押し潰そうとしていたモノ――まるで、精巧な襖絵のように夜空の姿を写し取った空そのものの破片が吐き出される。

魔理沙の見ている前でそれはあっけなく地面に落ちると、そこで粉々に砕け散った。

ちりりりん！

（――――！）

魔理沙の顔が、弾かれるようにして天へと向けられる。

――果たして、その先に彼女が知る幻想郷の空はなかった。

魔理沙が目を離した一瞬の間に、鳥居の後ろへと広がる空には、無数の罅が走っていた。……いや、違う。そうではない、この罅は、元からこの場所にあったものだ。今は、その認識の境界が消えて、目に見えるようになっただけのことでしかない。

霊夢が、かざした符へと霊力を注ぎ込むに従い、それまで無事に見え

ていた空の偽装までもが解かれていく。同時に、そこかしこへと新たな亀裂が走り、欠け落ちた空が弾幕となって大地へと降り注ぐ様子も徐々に明らかになっていった。

空が割れるたび、ちりちりんという音が優しく耳朶を振るわせる。欠けた場所には、ぞっとするような黒ずんだ虚無だけが顔を覗かせていた。

（こいつは……まさか、大結界が割れている音なのか？）

落ちてくる破片を回避しつつ、魔理沙は紫の横顔を見やる。

彼女は、これまでに見せたこともないほどの無機質な表情で、額に大量の汗を浮かべる霊夢の姿を見つめていた。

霊夢の指先に挟まれた符は既に霊力で満たされており、弱い地鳴りすら呼び始めている。集中のため閉ざされていた両目を見開くと、巫女の凛とした声が崩壊の夜へと突き立った。

「――かけまくも畏き、天頂へ座す幻想郷の龍神よ！　大結界を庇護せし要たる御身に、博麗の巫女たる者が恐み申す！」

ちりりりり……！

符に満ちた霊力が帯となって鳥居へ流れ込み、結界の割れる音がまた一段と大きくなる。

霊夢から力が注がれる度、亀裂の奥が霊力の色へと発光する。どくんどくんと脈を打つ光は、まるでそれ自体が生きているかのようだった。

「夢は夢に、現ならば現へと！　公正に分け隔て在ることを以て由とし、夢の現、現の夢が共にあらぬよう、幻想と現実の壁を厚くせよ！外の世界にて喪われし無垢なる原初の幻想を、無慈悲な穢れから祓い、遠ざけ、清め給え――」

霊夢が祝詞を言祝ぐたび、霊力の光によって満たされた亀裂の上へと、うっすらと元の夜空が浮かんでいく。紫の広げる無数のスキマも夢と現の境界を弄ることによってその儀式を手助けし、あれほど無残に罅割れていた空は、見る間に元の姿を取り戻しつつあった。

「すごいな、こいつは……！」

気が付けば、そんな賞賛が魔理沙の口からこぼれている。

星空を操る秘術はむしろ彼女の領分に近いが、それにしたところでこ

の規模での界面操作ともなると、ほとんど天球図を一から書き直すようなものである。正確には、彼女たちのやっていることは星図の変更ではなく、あくまで幻想郷とその外との間に横たわる理を押し広げているだけのことだが、それでも地上における見かけの摂理を丸ごと動かしていることに変わりはない。ソロモンの名すら想起させる大議式に、魔理沙はもう胸の高鳴りを押さえることができなかった。

「おいおい霊夢、流石にこいつはちょっと見直したぜ？　大結界崩壊の危機と知ったときには流石にどうなることかと思ったが、なんだ、これなら何の心配も――」

熱へと浮かされた魔理沙の台詞が、そこで止まる。

唇を噛み、霊夢は首筋から明らかに異常と言える量の汗を流していた。身体から大結界へと流れ込む霊気の量も、確実に常軌を逸している。

――常識的に考えれば、これだけの霊気を術のために費やす事などできはしない。もし体内にある霊力が完全に枯渇したならば、肉体と魂の垣根が崩れ、人としての輪郭を保つことさえできなくなる。そうなら

ぬよう、過剰な力が流れ出そうとした時には、身体にある霊絡(れいらく)が強制的にその流れをせき止めてしまうはずなのに――！

（あいつ、まさか――！）

そこで魔理沙は、どうして霊夢が符を通して霊気を流し込んでいるのか、その理由へと気が付いてしまった。あれは、霊気の流れを制するための符などではない――その逆、暴走させるためのものなのだ。

霊夢は今、霊絡が止めるべき枷(かせ)を外し、結界に必要とされるだけの力を無理にでも吸い上げられる状態となっている。おそらくは、大結界が完全に閉じ切るその瞬間まで――。

「あの、馬鹿……っ！」

見ておれず、魔理沙が足を踏み出しかける。

その前を、手袋に包まれた白い細腕(ほそうで)が遮(さえぎ)った。

「やめな、さい……！　あなたがしようとしていることは、あの子に、余計な苦しみを与えることにしかならない、わ……！」

霊夢ほどではないにせよ、紫もまた同様の能力の行使(こうし)によって、苦悶(くもん)

に顔を歪ませていた。あの、幻想郷の最古参のひとりでもある妖怪の賢者――八雲紫が。

その意味が分からぬほど、魔理沙も魔法使いとして無垢でも無能でもなかった。

――つまりこれは、それだけの儀式なのだ。

幻想郷という小さいとは言え完結したひとつの世界を、それ以外の全ての摂理から断絶させるための奇跡。それは、新しい宇宙を一から創世することと、果たしてどれほどの違いがあるのだろう。……そもそも、本来あるべき理から外れることで望みの結果を実現させる彼女たちの『能力』は、大なり小なり、必ず何らかの代償を必要とする。飛行や弾幕程度であれば体力だけで済ませられるが、――世界を作り直すだけの力というのは、果たして如何なる犠牲を要求するものなのか。

もはや少女の小さな身体から流れ出しているものは霊気の帯などではなく、彼女の生命そのものだった。これは、初めからそういう儀式なのである。

ちりりり、りりりりりん――
それだけのことが分かっていながらも、魔理沙は動くことが出来ないでいた。
目の前で立ちふさがる疲弊したスキマ妖怪など、今の魔理沙であればたやすく組み伏せることができる。
……だが、それでどうなる？　今ここで霊夢を止めたところで、あいつはまた同じ手順を最初から繰り返すだけだろう。それが、霊夢の身体にどれほどの負担をかけるのかは想像も付かない。もはや、どうすればいいのか分からず、魔理沙は泣きそうな顔で夜空を見上げた。空を覆っていた罅割れはもうほとんど見えなくなり、雲の晴れた星空の向こうに上弦の月が顔を覗かせる――。
「――――はぁッ！　はぁ、は……」
気が付けば、あれだけ煩く鳴り響いていた風鈴の音が止んでいる。
周囲は、また当たり前の夜の静けさを取り戻していた。
少女の荒げる激しい呼気の音だけが、その穏やかな静寂を乱してい

る。
それでも、魔理沙の前であまり無様な姿はさらしたくなかったのだろう。霊夢は強引に息を整えると、どういう表情をしていいか分からない顔で自分を見返す魔理沙に対して、不敵な笑みを張り付かせた。
魔法使いが何かを口にするより早く、彼女は一息に畳み掛ける。
「……これで、分かったでしょう？　結界の修復は、博麗の巫女にしかできぬ定め。ならば、その伝統を守り続けることこそが、巫女として生まれた私の役目よ」
「嘘だ」
頭が理解することを拒否し、反射的に魔理沙はそう断じていた。帽子のつばで顔を隠して、魔理沙は全身を振り絞るように問いかける。
「こんな真似が、いつまでも続けられるものか。大結界を保てるのが博麗の巫女だけだと言うなら、お前がいなくなった後はどうやって結界を保つんだ？　……矛盾、してるぜ」
その、あまりにも稚拙な指摘へと、霊夢は薄く頬を緩ませた。

やさしすぎる、今にも溶け消えてしまいそうな微笑で、霊夢は残酷な現実を口にする。
「――大丈夫よ。私が消えても、博麗の巫女がいなくなるわけじゃないから」
魔理沙が、顔を跳ね上げる。
その表情を見る限り、彼女も決して予想していなかったわけではないのだろう。それでも手は緩めずに、霊夢はまるで他人事のように説明を続けた。
「博麗の巫女とは、元来がその時々で結界と共にある者を指すだけの言葉なのよ。拍と礼を以て幻想を敬い、やがて剝し零となることで結界を護る。勘違いしないで欲しいんだけど、別に私は生け贄でも人柱でもないわ。元から巫女は、博麗という名をした結界が受け持つ、枠組みのひとつにしか過ぎないの」
霊夢の声には、いかなる感情さえも込められていない。
だからこそ、それは揺るぎのない実感となって魔理沙の胸へと抉りこ

む。
「私が消えた後には、程なくして大結界と調和した――いいえ、違うわね。結界によって選ばれた巫子が必ず現れる。博麗の巫女は、そうした『代替わり』を繰り返すことで、すり減った力を取り戻すようにできているの」
「なんだよ、それ……」
問いかけには応じず、霊夢はまるでそうすることが自然であるかのように話を結んだ。
「心配しないで。幻想郷は、昔からこうして守られてきたの。だから、あなたが不安に思うようなことは何もないわ」
紫へと手を引かれ、霊夢は魔理沙の横をすり抜けて母屋への道を戻っていく。
魔理沙は、全力で振り返った。飛び跳ねた雫が、雨粒かそれとも別の何かであるのかは、もはや彼女自身にも判別できない。遠ざかりつつある背中へと向け、魔理沙はこみ上げてきた気持ちをそのまま叩きつけ

た。
「そうじゃない――そうじゃ、ないだろッ!?」
霊夢は半分だけ振り返った。
音も無く、薄いまぶたが伏せられる。
「……同じ事よ。私という存在が喪(うしな)われても、すぐに次代の巫女がその場所を埋める。それでいいのよ」
それだけを告げると、霊夢はあっけなく背を向ける。迷いもなく歩んでいくその姿は、今の彼女にはあまりにも遠い。
追いかけることなど、できなかった。
ひとり残された暗闇(くらやみ)の底で、魔理沙はせめて元の姿を取り戻した夜空を見上げる。
とうに見飽きていたはずの星々と月は、思わず息を呑むほどにまで美しかった。

――続

夢から、さめる
~Tricoroll Close Ending.

「東方Project」二次創作小説
試し読みver.

原作　：　上海アリス幻樂団
発行　：　**DreamWish**
著者　：　KuMA
表紙　：　弘世（アルトノイラント）
初出　：　2009.12.30
電子版：　2011. 3.27
連絡先：　kuma-t@mwc.biglobe.ne.jp
Ｗｅｂ：　http://www5c.biglobe.ne.jp/~D_Wish/

本書の一部または全てを無断で転載することを禁止します